

「地域における子育て支援ネットワークの構築に関する研究」
研究協力者報告書

子育てグループが準拠情報源として果たす役割
——近年の特徴と変化——

山岡テイ 情報教育研究所

要約

母親達は、自分自身の母親としてのモデルやしつけ・教育の参考にしたい友人との出会いを居住地域にとどまらず、子育てグループなどさまざまな出会いの場や集団へと求めていた。子育てグループを準拠情報源として積極的に活用する母親がいる反面、母親同士の交流の機会が増えるとともに、内集団や集団間での対人関係の悩みも深まり、育児不安が増幅する側面があることも明らかになった。

さらに、働く母親にとっては、地域での子育て支援が享受しにくい現状や社交性などの個人特性が子育てづきあいにも大きく影響している点などを考慮して、近年増加してきた多文化な背景をもつ母親なども含めて、特別な配慮や個別対応ができる支援方法が必要であることを調査結果は示唆していた。

見出し語：準拠情報源 子育てグループ 準拠コミュニティ

はじめに

近年、乳幼児を抱える母親達の間で友達づきあいを苦手を感じる親子が増えており、育児の気がかかりや育児不安に関する経年調査結果でも、子育てづきあいでの人間関係の悩みが上位にあげられている。しかし、その一方では、情報化時代に育った育児期の母親達は、育児情報の入手や活用方法に関して独自の行動様式を示しており、子育てグループや近所の子育て仲間から得る育児情報を重要視している。そこで、母親達が育児の参考として準拠する子育てグループ（集団）が、情報源としてどのような役割を果たしているのか、また、母親達は子育てグループなど準拠コミュニティで出会う友人達にどのような期待を抱いているのかを、時系列調査を通して、その特徴と変化を検討した。

1. 母親にとっての子育てグループ

毎日の生活の中での不安や気かかりを軽減するために、母親達は自分が準拠する集団や人々からさまざまな育児情報を得ている。

準拠集団（reference group）を Sherif, M. (1964) は、「個人がその一員として認められたいと望んでいる集団、そして、その意見がかれにとって重要であり、その規準や目標をかれと同一であるような人びとを含んでいる集団に他ならない」と定義している。

実生活の中で個人が2つ以上の準拠集団をもつことはよくあることである。Kiesler らは、準拠集団を直接会うことがない集団でも本人が他のメンバーを知っており、準拠することを望み、他のメン

バーを情緒的・認知的に重要であると感じていれば、その集団に準拠していると見なせると定義している (Kiesler, C. A. & Kiesler, S. B. 1969)。

母親の育児生活の中での準拠集団といえば、配偶者、子どもを含む家族、祖父母や親戚、近所の友人、職場や宗教団体、趣味のサークル、園の先生や母子保健の専門機関、以前住んでいた地域の子育て仲間、子どもの習い事やスポーツクラブの親、インターネット上でのメーリングリスト、BBS やチャット仲間など育児観や価値観を媒介にした個人的なネットワークのさまざまな広がりを含み、そのひとつが子育てグループである。そして、母親達は、それら準拠集団も含む多様な社会的情報源の中で子育て生活を送っている (図 1)。

近年、行政の子育て支援政策や IT 革命など母親を取り囲む環境構造自体が変化し、母親の情報収集や情報活用行動にも影響を及ぼしている。

それまで、乳幼児を連れて近くの公園や砂場などで「公園デビュー」をしていた親達が地域の公民館やコミュニティ・センターなどへ集まり、子育てサークルや親子講座への参加が急速に盛んになったのは、1980 年代後半からである。90 年代に入り、1994 年には 4 省合意で策定されたいわゆるエンゼルプランでは、従来の子育て支援に加えて、「地域子育て支援センターの大幅拡充」や 97 年には、文部・厚生両省の共同企画で子育てサークルや住民参加型保育の推進などが提唱されており、改正児童福祉法が施行されている中で、行政レベルでも独自の地域支援策を行っている。また、近年、活動する母親達が中心となった子育てネットワークや各種子育て支援の NPO なども各地で設立されている。

本研究の一環として実施された「子育て活動参加に関する全国調査」では、回答者 1,012 人中 27.0% が子育てグループに参加していた。その内、「保健センター、児童館、社会福祉協議会、公民館など主催の子育てグループ」に参加している親が最も多く 57.9% で、「母親同士の自主的グループ」32.3%、「園が活動の場のグループ」14.7%、「子育てサポーターや先輩ママなど専門家が加わっているグループ」8.8% など、1 人で複数の子育てグループに参加していることが明らかになった (中村ら 2002)。

さらに、グループに参加した感想を 20 項目 4 段階評定で尋ねて因子分析した結果では、第 1 因子は「子ども同士のトラブルがある」、「自分や子どもが仲間はずれになったことがある」、「場所探しや企画運営が大変」、「専門家やリーダーに問題がある」など「集団対人トラブル」、第 2 因子は「気分転換や生活リズムづくりになった」、「親子で楽しい時間を過ごせる」などの「親子活用意識」、第 3 因子は「いろいろと役に立つ情報が得られた」、「子どものしつけや教育に役に立つ」など「役立有効感」、第 4 因子は「子育て仲間知り合えた」、「子育ての悩みや不安が解消できた」など「出会い親近感」、第 5 因子は「どこかのサークルに属している安心感がある」、「子どもの社会性や能力を育てるのに役に立つ」の「社会性・安心感」の 5 因子解に分かれた。累積寄与率 44.05%、 $\alpha = .7326$ であった (表 1)。

また、「いつも子どものことで相談する相手」として、「子育てサークル・グループ」を選んだ母親を上記の 5 因子と一要因の分散分析で比較すると、第 1 因子以外は、すべて、極めて高い有意差があり、子育ての相談をグループ内のメンバーにしている母親は子育てグループ活動に積極的に肯定的意識をもって参加していることが明らかになった。

その一方で、その他の「近所の人」や「祖父母」、「配偶者」、「園の先生」はじめ他の準拠者にいつも相談していると回答した母親では、有意差がまったく見られなかったことから、「いつも子どものことで相談する相手」として、「子育てサークル・グループ」を選んだ母親にとっては、「子育てグループ」は彼女たちが準拠する情報源として確かな役割を果たしていると思われる。

しかしながら、第 1 因子「集団対人トラブル」が示すように、参加の感想としては内集団での親子での対人関係のトラブルや会の運営など否定的意見も目立ち、「子育てグループ」での人間関係に悩ん

でいる母親は多く、とくに、近年、親子での子育てつきあいに消極的な親が増えている傾向特徴を本調査結果も同様に提示していた（山岡ら 1998, 1999, 2001a, 山岡 2000, 2002）。

加えて、子育てグループに母親の 68.3%、が参加していない理由としては、「近くにない」32.6%、「参加の必要がない」25.0%、「仕事で時間がない」12.7%、「人間つきあいがいやだから」6.1%などがあげられており、グループをやめた理由では「仕事をはじめたから」13.3%など、パートタイマーも含めて働く母親にとっては地域の子育てグループ支援は享受しにくい状況にあることも同時に示していた。さらに、別の実態調査では、地域情報誌に母親達が自主運営している子育てグループが紹介されていても、4 年間に記載された半数が「新入会不可」と明記されており、実質的には閉ざされた仲間集団であったとの報告がなされていた（坂本ら 2001）。このように、母親にとって子育てグループは、そのメリットを享受できる人達がいる反面、そうではない母親も多いことが明らかになった。

2. 母親の個人特性による子育てつきあいの受けとめ方

母親達が準拠するさまざまな子育て仲間やグループの中での子育てつきあいを、個々の母親自身がどのように受けとめているかによって、母親が抱く育児不安感にも相違があるのであろうか。

近年の子育て意識に関するいくつかの調査において、「知らない人ともすぐに親しくなれる」・「自分と違う考えの人たちの中でもうまくやっつけていける」・「他の親達が話しているところに気軽に参加できるほうだ」・「まわりの人と調子を合わせるのが苦手なほうだ（逆転項目）」など6項目による『子育てつきあい積極的親和性傾向』高低群による母親の育児不安感や育児意識を比較した結果では、いずれも極めて大きな有意差が出ていた（山岡 2000, 2002, 山岡ら 2001a）。

具体的には、『子育てつきあい積極的親和性傾向』が高い母親は、育児不安が低く、これは、日本人の母親だけではなくて、65 カ国籍から構成される日本に住む多文化な背景をもつ家族の母親達に関しても同じ結果が見られた（山岡ら 2001a）。

さらに、これら多文化な母親達の中でも個人特性である『子育てつきあい積極的親和性傾向』が高い母親達は、園生活での先生や他の親とのコミュニケーションに関して、「園で親同士が知り合いになれるのが良い」と有意に多く感じており、自分から先生へと努めて話かけ、行事や保護者会にも積極的に参加するなど意欲的であった。

多くの母親にとって、自分自身の成育環境と異なる日本での子育ては、戸惑いや困難感が伴うことは予測される。しかしながら、多文化な背景をもつ母親も日本人を対象にした調査結果と同様に、『子育てつきあい積極的親和性傾向』が高い母親は低い母親に比べて、「ネガティブな関わり」、「教育不安感」、「育児劣等感」、「現状不満感」、「子育て焦燥感」の5因子による育児不安のすべてにおいて有意に低いという結果であった。

このことは、文化や民族を越えて、育児不安感にも母親の個人特性である子育てつきあい積極性親和性傾向が大きく関与していることを示していた。その一方で、低群の母親は、「日本人保護者とのつき合いや参加行事が多い」ことを負担に感じており、「人間関係のトラブル」を抱えて悩んでいる深刻な状況下にあった。園の先生からの特別の配慮や地域社会での家族全体に向けた社会的援助が必要とされていることを調査結果は提示していた。

性格上の特性として社交的で他の母親へ自分から働きかけることができる母親は、普段から周囲の人達に積極的にかかわっていることは推測できる。そのために、国籍や民族を問わず、Gouldner, A. (1960)のいう互惠性の規範意識やFoa, U. G. (1971)の交換財としての愛情や奉仕の交流が準拠集団

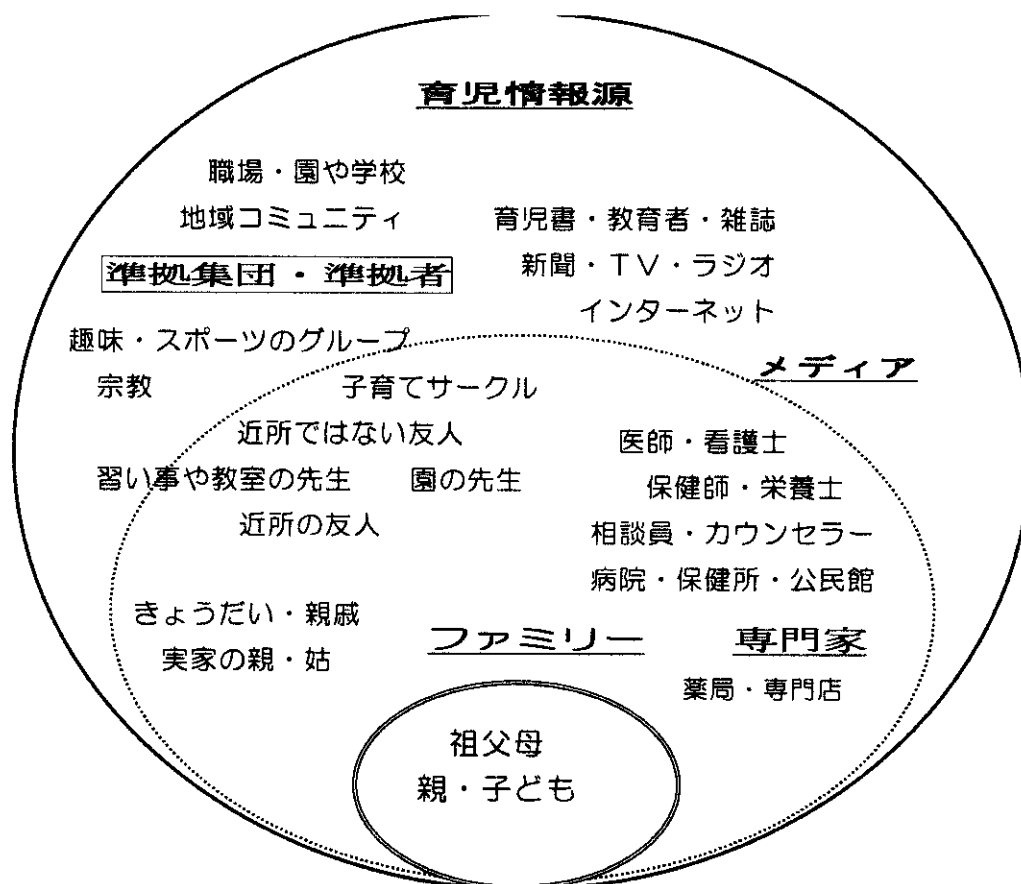
内の人間関係で働いているために、母親側の受けとめ方の違いは、必ずしも、個人の性格特性からくる受けとめ方の相違だけではなくて、事実関係に基づいていることも考えられる。

しかしながら、日本人の母親を対象にした準拠情報源に関する調査結果を時系列で見ると、母親達は「近所の友人」を最も信頼する情報源や最も影響を受ける情報源の上位にあげているが、同時に最も不安になった情報源の上位にも「近所の友人」をあげており、一部の子育てグループも含む居住地の中での人間関係のむずかしさを物語っていた。

また、母親の就労状況別に子育て支援環境を見ると、「近くに子どもを預け合える友人やグチを言い合える子育て仲間がいる」、「自分らしさを出せる友人やグループなど集まれる場がある」などの『子育て仲間意識』は、常勤者よりパートタイマー、さらに、地域にいる時間が長い専業主婦のほうが有意に高かった。また、パートタイムで働く母親は、家庭と仕事の狭間で、さまざまな『夫サポート』を得られていないと感じていただけてはなくて、『姑との関係』も専業主婦に比べて、困難な状況であ

図1 家族を囲む準拠集団（準拠者）としての育児情報源

(山岡 1995 より作成)



るという結果であった（図2）。

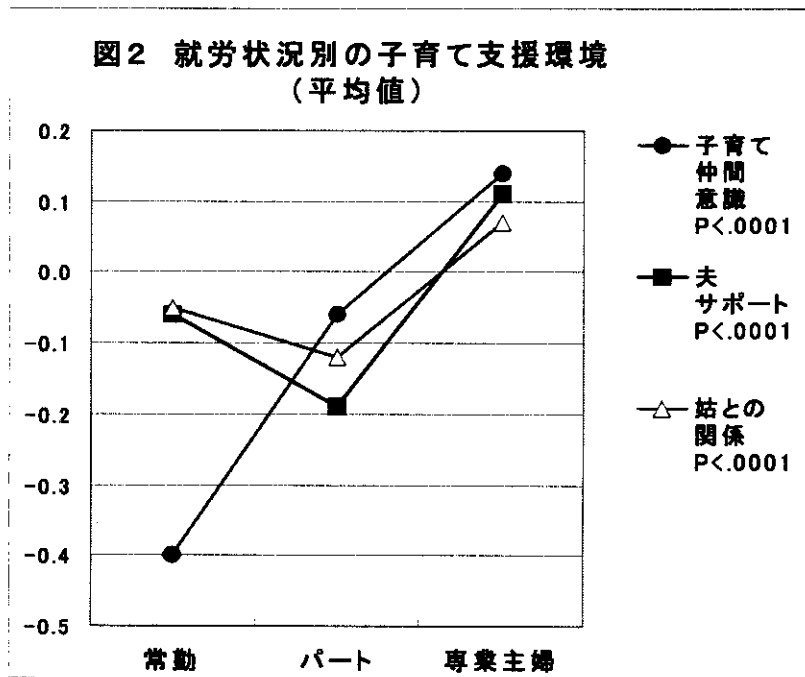
現状では、パートタイマーの定義づけが一様ではなく、一般労働者に比べて、不安定な立場に置かれており、子育てグループには物理的に参加しにくい母親も多い状況である。

職場や家庭、さらには地域でも、パートタイマーとして働く母親への一層の理解と個別対応した子育て支援が求められていると思われる（山岡ら 2001a, 山岡 2002a）。

以上のように、母親にとって子育てグループは、子育ての悩みを共感できる友人との出会いの場に

なると同時に、対人関係の悩みが増えていき、不安が増幅するという諸刃の刃のような存在になる側面もあることをいずれの調査結果も示唆していた。

図2 就労状況別の子育て支援環境の受けとめ方



3. 時代とともに変化する準拠情報源

行政が子育て支援策を行う以前に、外出型の育児を促進させた要因として、紙おむつや子守具（前抱きバンド）など外出育児用品の普及と育児雑誌が提案した育児スタイルがあげられる。

子連れで母親達が行動しやすくなり、活動範囲が広域になるに従い、準拠コミュニティが広がり情報環境にも変化が表れた。近くの公園での出会いや居住地域内での情報収集活動に留まらず、積極的に準拠したい「子育てグループ（サークル）」や「習い事や教室」、「近所ではない友人」との交流の機会が増えていくことになった。また、情報化・高学歴化時代に育った母親は、ビジュアルな活字媒体である育児雑誌から大きな影響を受けて子育てをしている。

育児雑誌は、従来から0~1歳児の母親の重要な情報源ではあるが、近年の特徴としては、私的・公的な子育てサークルの増加、インターネットによる育児情報の収集や育児用品の購入・オークションによるリサイクル、BBSによるバーチャルなコミュニティでの出会いが広がってきており、母親達の準拠情報環境も変化している。

また、母親達は知りたい情報内容によって育児情報源を明確に選択しており、いくつかの情報源から入手した情報の質をさらに吟味している（表2）。

表1 子育てグループ参加意識の因子分析結果

No.		1	2	3	4	5	共通性
		集団対人 トラブル	親子活用 意識	役立ち 有効感	出会い 親近感	社会性 ・安心感	
Q11-7	子ども同士のトラブルがある(あった)	0.797	0.091	0.089	-0.068	-0.077	0.583
Q11-3	親同士のトラブルがある(あった)	0.629	0.012	0.050	-0.016	0.058	0.379
Q11-16	自分や子どもが仲間はずれになった ことがある	0.584	-0.084	0.198	-0.281	0.144	0.360
Q11-6	サークルの役割分担やお手伝い が面倒	0.535	-0.019	0.078	0.091	-0.232	0.317
Q11-14	子育ての意見の合わない親子がいる	0.509	0.069	-0.325	0.141	0.079	0.444
Q11-8	場所探しや企画運営が大変である	0.501	-0.043	0.091	0.093	-0.039	0.248
Q11-9	専門家やリーダーに問題がある	0.494	-0.138	0.032	-0.094	0.073	0.281
Q11-15	子どものために嫌なことを我慢してい	0.478	0.036	-0.244	-0.040	0.016	0.354
Q11-11	気分転換や生活リズムづくりになった	-0.031	0.886	0.086	-0.111	-0.087	0.688
Q11-10	親子で楽しい時間を過ごせる	-0.140	0.628	0.143	-0.010	0.047	0.581
Q11-12	子どもが同じくらいの子ともと遊べた	0.032	0.462	0.042	0.223	-0.019	0.385
Q11-13	いろいろなタイプの親子がいることが わかった	0.212	0.356	-0.223	0.243	0.079	0.317
Q11-20	いろいろと役立つ情報が得られた	0.131	0.027	0.640	0.489	-0.096	0.808
Q11-4	子どものしつけや教育に役立つ	0.047	0.100	0.528	-0.018	0.268	0.497
Q11-5	専門家からのアドバイスを得ることが できた	0.055	0.039	0.436	-0.023	0.065	0.209
Q11-1	子育て仲間知りあえた	-0.091	-0.024	0.092	0.752	0.015	0.627
Q11-17	同じような立場の親子と知り合えた	-0.012	0.028	-0.076	0.459	0.361	0.472
Q11-20	子育ての悩みや不安が解消できた	-0.071	0.017	0.240	0.372	0.283	0.513
Q11-18	どこかのサークルに属している 安心感がある	0.026	-0.142	0.086	0.135	0.543	0.327
Q11-19	子どもの社会性や能力を育てるのに 役立つ	-0.035	0.145	0.135	-0.079	0.526	0.419
	因子寄与率(%)	22.533	12.789	3.482	2.771	2.471	
	累積寄与率(%)	22.533	35.322	38.804	41.574	44.045	
	Alpha係数 $\alpha=0.7326$.7901	.7283	.6523	.7165	.5188	

因子抽出法: 主因子法・プロマックス回転法

一例をあげると、子どもの習い事に関する情報を収集する際には、育児雑誌に掲載された先輩ママの体験談や教材・通信教育の広告、専門家の教育助言記事を無意識のうちにも参考にして、近所や子育てグループの友人には具体的な教室やスクールの評判や実績情報を聞き、信頼する友人や親族から先行事例を提供してもらい、さらに、候補として選定された複数の教室を見学した後に最終判断を行

う情報収集や行動の流れがある。

これらの情報行動の入り口として育児雑誌は、乳幼児の母親にとって、掲載された身近な多くの具体例に共感を覚えるとともに、専門家による医療保健・発達や教育のオーソライズされた情報が入手できて、最新の便利な育児用品紹介のカタログ誌としても「パーソナルな時間と空間」で活用することができる位置づけである。

しかし、90年代後半から近年では、同じく「パーソナルな時間と空間」で情報を入手できるインターネットの登場が育児情報環境を変えつつある。

子育てサークルの中でのインターネットの活用方法は多岐にわたっている。従来のサークル回覧ノート（交換日記）がBBSや連絡用のメーリングリストへと、井戸端会議的なチャットや自己紹介としてのHPなどへと変化していった。インターネット上だけの会員としてのサークル参加だけのバーチャルな交流であっても、母親にとっては、サークルのメンバーとしての準拠意識が高く、その集団からの情報を活用することができる。実際には、親子で直接に会い、その後の情報交換ツールとしてインターネットを活用している母親も多いのが現状である。

現状のインターネットの普及を示すように、育児情報源としてのネット活用率は、1998年実施の調査では、わずか0.7%、1999年の実査では4.8%であったのが、2000年の日本における多文化子育て調査では13.1%となり、2002年実施の調査では26.8%に上昇しており、今後さらなる増加が予測される（山岡ら 1998、1999、2001a、2002b）。

※ 保健所は保健師や栄養士、病院は医師や看護師、姉妹親戚は母や姑以外の親戚。

回答選択肢に配偶者は含まれていない。（山岡 1995 より作成）

4. 育児モデルとしての友人と高信頼情報源

0～1歳の乳幼児を抱える母親にとっては、育児書・育児雑誌が情報源として大きな役割を果たしていることは前述したが、近年における情報源の経年調査では、幼児の母親全体があげる高信頼情報源の上位は、「夫、近所の友人、実家の母、園の先生」が占めている（山岡 1995、1996、2000、2002 山岡ら 1998、1999、2001a）。

母親の就労状況や当該児の出生順位や年齢によって、その順位は異なるが、基本的にこの4者が幼児・児童を抱える母親の高信頼情報源であり、育児の規範として参考にしていく準拠者と言えるのではなかろうか。

山岡ら（1998）は、3歳から8歳までの母親達に「しつけや教育」の情報源を尋ねて、それら26項目中からとくに信頼する情報源の上位3つを選択回答してもらった。また、別の設問では、『子どものしつけや教育を考えていく上で、とくに「あのような母親になりたいな」と思うモデル——具体的な目標やお手本、参考になるような人』を単一回答してもらい、その人を『最も参考にしていく理由』を自由記述してもらった。

その結果で高信頼情報源の1位の欄にあげられたのは、①近所の友人 20.6%、②夫 16.4%、③実家の母 15.6%、④園や学校の先生 12.2%、⑤近所ではない友人 6.5%の順であった。

育児モデルとして単一回答されたのは、①実家の母 29.9%、②近所の友人 16.0%、③子どもの友達の母親 13.7%、④近所ではない友人 9.2%、⑤その他の人 7.8%であった。ただし、回答項目の選択肢に「配偶者」は含まれていなかった。

実家の母を第1位にあげていたのは、年少児の親が最も多く、子どもの出生順位では第1子目の子育てをしている母親のほうが第2子以降の母親よりも多かったのが特徴的であった。

表2 領域別育児情報の入手先（0歳～3歳児をもつ母親）

領域	内容	順位				
		1	2	3	4	5
授乳 離乳食	授乳・離乳食全般	保健所 45.9%	近所の友人 45.8%	育児雑誌 45.0%	育児書 34.7%	実家の母 31.8%
	量や栄養バランス	保健所 40.1%	近所の友人 31.6%	育児雑誌 30.7%	育児書 26.9%	病院 21.2%
	食の安全性	育児雑誌 27.8%	保健所 20.7%	近所の友人 19.9%	新聞 16.8%	テレビ 15.5%
	断乳・哺乳瓶はずし	近所の友人 30.8%	育児雑誌 24.7%	保健所 21.8%	育児書 19.6%	実家の母 17.6%
体の 気が かり	体の気がかり全般	病院 57.4%	近所の友人 42.4%	保健所 39.5%	育児雑誌 35.1%	育児書 32.3%
	アレルギー	病院 47.2%	育児雑誌 22.3%	育児書 20.1%	保健所 20.0%	近所の友人 17.2%
	体の発達	病院 43.0%	保健所 32.6%	近所の友人 25.5%	育児書 24.9%	育児雑誌 22.4%
	睡眠や泣き	近所の友人 32.7%	実家の母 23.5%	育児雑誌 21.8%	育児書 18.4%	保健所 17.4%
育児 用品	育児用品全般	近所の友人 48.6%	育児雑誌 47.0%	近所では ない友人 29.2%	姉妹親戚 19.2%	育児書 18.8%
	紙おむつ	近所の友人 41.4%	育児雑誌 30.7%	近所では ない友人 21.9%	テレビ 12.4%	姉妹親戚 11.8%
	乳首や哺乳瓶	育児雑誌 28.1%	近所の友人 26.4%	近所では ない友人 15.0%	姉妹親戚 10.4%	保健所 10.0%
	おもちゃ	近所の友人 21.4%	育児雑誌 15.4%	近所では ない友人 6.2%	百貨店・ スーパー 6.1%	姉妹親戚 5.8%
し つ け 教 育	しつけ・教育全般	近所の友人 45.8%	育児雑誌 43.1%	実家の母 33.1%	育児書 30.9%	近所では ない友人 22.3%
	食事のしつけ	育児雑誌 30.4%	近所の友人 28.9%	実家の母 28.5%	育児書 21.1%	保健所 16.6%
	トイレトレーニング	近所の友人 33.2%	育児雑誌 31.8%	実家の母 19.7%	育児書 18.6%	近所では ない友人 13.6%
	乳幼児教育	育児雑誌 30.9%	近所の友人 28.0%	育児書 16.8%	近所では ない友人 13.8%	実家の母 11.5%

自分自身の子育て体験の有無によって、準拠者が異なることは、Ajzen, I. et al (1980)の「合理的行為理論」や Bentler, P. et al (1979) の拡張モデルによる現状認知を支持していると思われる。

具体的には、第1子目3歳男児をもつ母親が、実母を育児モデルとしてあげている理由として、「何かあったときは母だったら、どうしたかなとすぐに考えてしまう。結局は自分が育てられたようにしか子育てはできない。意識せずとも母の育て方で現在の自分の価値観ができているので」という自由記述意見に代表される。

また、母親の就労状況、子どもの学年、出生順位などの属性で比較した結果でも、参考にしたい人は「実家の母」が最も多かった。しかしながら、2位以下は、近所の友人、子どもの友だち

の親、子育てグループで出会った同じ年頃の子どもの親、近所ではない友人などであり、基本的にはすべて「友人・知人」の範疇に入る人々であるので、それらを「友人」という総称で括ると「友人」の方が「実家の母」より育児のモデルとして参考にしたい人としては多い結果となった。

さらに、就労状況別に見ると、常勤者は職場の人や恩師、さまざまな場で知り合った知人を含む「その他の人」を第2位にあげていた。また、母親達が「近所ではない友人」と知り合った場所としては、「学生時代」23.6%、「職場」18.1%、「以前住んでいた所」16.0%、「自分の習い事やサークル」12.5%などがあげられていた。

つぎに、育児モデルの参考理由としてあげられた自由記述 (N=1,279) を 65 項目による分類コードによってコーディングを行った。

その集計結果では、①「子どもの気持ちを把握して、子どもの立場に立てる。」16.7%、②「感情的にならず、穏やかに言ってしつけている。」10.6%、③「ゆったりと心に余裕があり、のびのび育てている。」10.4% ④「尊敬している。立派で憧れている。信頼している。」10.2% ⑤「子どもが優秀。よく育っている。」8.0% ⑥「自分や夫を育ててくれたから。」7.3% ⑦「自分をよくわかってくれている。育児の相談相手。」6.3%などが上位にあげられていた。

これらの自由記述内容の全体を分析すると、育児の参考にする人を選定する際の基準枠としては、

- * 母親としての目ざす養育態度や行動特性を備えている
- * 確かな実績・成果・経験など目に見える証拠がある
- * 望ましい価値観や教育方針による安心感や信頼感などに集約される。

母親達は上記のような意識のもとで、子どもへの期待を抱き不安を解消するために、さまざまな準拠する人や集団である子育てグループへと向かい、メディアを通して育児情報を入手している。そこで、育児モデルとして単一回答であげられた特定化できる対象（“その他の人”は除く）の上位7位と高信頼情報源として1位にあげた対象とをクロス集計してカイ二乗検定で相関性を検証した（表3）。その結果では、 $\chi^2(36)=605.10$ $P<.0001$ で、高信頼情報源として選定した対象を育児モデルとして選定している母親が、どの情報源においても、最も有意に多いことが明らかになった。

具体的には①実家の母 141 人 71.9%（以下すべて残差確率は $P<.0001$ である）、②近所の友人は 68 人 47.2%、③近所ではない友人 29 人 52.7%、④園や学校の先生 25 人 32.1%、⑤母や姑以外の親戚 19 人 49.5%、⑥姑 15 人 68.2%、⑦習い事や教室の先生 7 人 53.8%であった。

このことは、母親達が、自分の情報行動の中で意図的に情報源を選定しており、育児生活で出会う友人や信頼できる育児の先輩や専門家などを、子どものしつけや教育の規範として私的受容をしながら内面化していることを示唆した。

従って、これら母親が信頼する情報源を媒介として育児規範を確認しているということは、高信頼情報源でもある準拠する子育てグループが母親の育児準拠枠の役割を果たしていることと思われる。子育てを通して知り合った気の合う友人や必要な育児情報を交換し合える友人達の中から、自分の母親としてのモデルや子どもの将来の教育への期待を含めて参考にしたい友人との出会いを求めていた。情報化時代の母親達の行動領域は居住地域にとどまらず、さまざまな出会いの場や集団へと広がっている側面が調査結果には顕著に表れていた。

表3 育児モデルにしたい人と高信頼情報源

($\chi^2_{(36)}=605.10, P<.0001$)

育児モデルにしたい人	高信頼情報源	近所の友人・知人	近所ではない友人	実家の母	母や姑以外の家族・親戚	姑	園や学校の先生	習い事や教室の先生	合計
近所の友人・知人	度数	68	5	17	5	1	14	2	112
	高信頼情報源の%	47.2%	9.1%	8.7%	11.1%	4.5%	17.9%	15.4%	20.3%
	残差	9.4****	-2.2	-5	-1.6	-1.9	-0.5	-0.4	
近所ではない友人	度数	10	29	15	3	0	11	0	68
	高信頼情報源の%	6.9%	52.7%	7.7%	6.7%	0.0%	14.1%	0.0%	12.3%
	残差	-2.3	9.6****	-2.5	-1.2	-1.8	0.5	-1.4	
実家の母	度数	41	9	141	12	5	21	1	230
	高信頼情報源の%	28.5%	16.4%	71.9%	26.7%	22.7%	26.9%	7.7%	41.6%
	残差	-3.7	-4	10.7****	-2.1	-1.8	-2.8	-2.5	
母や姑以外の家族・親戚	度数	6	3	8	19	1	0	2	39
	高信頼情報源の%	4.2%	5.5%	4.1%	42.2%	4.5%	0.0%	15.4%	7.1%
	残差	-1.6	-0.5	-2	9.6****	-0.5	-2.6	1.2	
姑	度数	10	1	5	1	15	6	1	39
	高信頼情報源の%	6.9%	1.8%	2.6%	2.2%	68.2%	7.7%	7.7%	7.1%
	残差	-0.1	-1.6	-3.1	-1.3	11.4****	0.2	0.1	
園の先生	度数	4	6	6	3	0	25	0	44
	高信頼情報源の%	2.8%	10.9%	3.1%	6.7%	0.0%	32.1%	0.0%	8.0%
	残差	-2.7	0.9	-3.2	-0.3	-1.4	8.5****	-1.1	
習い事や教室の先生	度数	5	2	4	2	0	1	7	21
	高信頼情報源の%	3.5%	3.6%	2.0%	4.4%	0.0%	1.3%	53.8%	3.8%
	残差	-0.2	-0.1	-1.6	0.2	-1	-1.3	9.6****	
合計	度数	144	55	196	45	22	78	13	553
	高信頼情報源の%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

****P<.0001

5. 情報準拠者としての友人と育児情報積極収集モデル

母親の育児不安を軽減する要因として、夫や実家の母、友人との良好な対人関係や社会的援助の有無が過去の多くの優れた研究で明らかにされている(牧野 1982, 青木ら 1986, 大日向 1988, 川井ら 1994, 佐藤ら 1994, 吉田ら 1999)。

しかしながら、それらは、主として、母親が育児援助を受ける側としての受動的な観点に立っていることが多かった。そこで、母親自らが、情報源をどのような判断理由の基準枠で選び、どの程度活用しているのかを母親の個人特性としてとらえて、情報収集意識や行動面から検証し、情報準拠集団や情報準拠者との相互関連性を考察した(山岡 2001b)。

これら母親を取り囲む人的支援ネットワークは、母親にとっては、同時に育児情報の入手先であり、準拠者や準拠集団となる情報源でもある。

池田(1996)は、我々がもつソーシャル・ネットワークの中で、それぞれの個人の行動に影響を与える重要他者は、個人が接触し、受容する多くの情報をコントロールしており、物事を考えたり決めたりする際の、「情報環境」になっていることを指摘している。

育児情報源はヒューマンメディアだけに限らず、新聞やテレビ、育児雑誌などのマスメディアや電話相談なども含まれる。また、近年はインターネットで、家に居ながらにしてグローバルな育児情報が入手でき、さらに、BBSによる井戸端会議や母親同士の情報交換までもが可能な情報環境になってきた(表1)。

1) 信頼情報源と重要視する判断理由

調査対象者は東京都と埼玉・神奈川・千葉県に住む1歳から6歳までの就園児をもつ母親。調査時期は1999年7~8月で、調査方法は園通しの郵送法、及び留め置き法。有効集計数は1,704通であった。

母親達は育児情報の入手先を育児の気がかりの内容によって選定していることは、前述した「3. 時代とともに変化する準拠情報源」の表2でも明らかである。

また、本調査の育児の気がかりや不安の調査項目に対する回答としては、子どもの生活習慣の自立やしつけ・教育に関する内容が上位を占めていた。ここで論述する“情報源”とは、すべて、“しつけ・教育情報源”に限定して尋ねた結果である。

母親が活用する情報源として4段階評定の平均値が高かったのは、①近所の友人(M3.10、SD0.84)、②夫(M3.09、SD0.93)、③園の先生(M3.07、SD0.78)、④実家の母(M2.82、SD0.96)の順で、家族を核にした地域コミュニティであった。さらに、上記の活用情報源の中でもっとも信頼する情報源として単一回答であげられた結果では、①夫23.9%、②近所の友人19.2%、③実家の母17.6%、④園の先生10.9%と、順位の入れ替わりはあるが上位4位は同じ情報源で占められた。

つぎに、最も信頼性の高い情報源とその判断理由として、「とても重要である」と回答した内容をクロス集計した。“夫”を高信頼情報源として選んだ母親は、「夫が育ったように、子どもを育てたい」・「わが家らしい子育てをしたい」・「自分の身内である」ことなど、「ファミリー意識」や「独自性」をととても重要であるとしていた。“近所の友人”を高信頼情報源として選んだ母親は、「同じ年ごろの子どもがいてわかりあえる」・「身近で相談しやすいこと」の「親近性」を有意に多くあげていた。また、“実家の母”は、「自分が育ったように、子どもを育てたい」・「自分の身内である」などの「ファミリー意識」と、親としての「経験や体験内容が豊富である」ことが重要視されていた。“園の先生”は、「専門的な知識がある、最新情報・正確な情報が入手できる」など「専門性」がもっとも重要な判断理由として、それぞれが有意に多い結果であった。以上のことから、母親達は、明確な情報収集意識をもって、しつけ・教育情報源を選定していることが明らかになった。

2) 育児情報積極収集モデルと準拠コミュニティ

つぎに、母親達がしつけや教育情報の準拠集団や準拠者に対して、どのような意識で収集活動を行っているのか、また、それぞれの情報規範枠との相互関連性を検証するために、共分散構造分析による検証を行った。各要因間の相関係数を算出する際の手続きとして、しつけ・教育17項目の活用情報源で因子分析を行った。因子間に相関があることが予測されることから斜交解(プ

ロマックス回転) で求めた。第1因子は医師や看護婦・保健師や栄養士・園の先生の「専門家」、第2因子は、テレビ・ラジオ、新聞の「マスメディア」、第3因子は育児書・専門書、育児雑誌の「書籍」、第4因子は、実母や親戚など「親族」、第5因子は、近所の友人や近所ではない友人に習い事の先生も含む「準拠コミュニティ」、第6因子は、相談機関やインターネットなどの「個別アクセス」、第7因子は夫と自分の子どもの「家族」の以上7因子解に分かれた。累積寄与率は39.8%であった($\alpha=.7469$)。同様に、活用情報源が信頼できると判断する理由12項目を因子分解した結果、第1因子は「自分が育ったように子どもを育てたい」「夫が育ったように子どもを育てたい」「自分の身内であること」などの、「ファミリー意識」、第2因子は、正確性、最新情報性、専門的な知識などの「専門性」があげられた。第3因子は、「同じ年ごろの子どもがいてわかりあえる」、「経験や体験内容が豊富である」、「身近で相談しやすい」、「子どものことをよく知っている」などの「親近性」、第4因子には、「個人的なことが守られる」、「わが家らしい子育てがしたい」など「独自性」の以上4因子解に分かれた。累積寄与率39.7で $\alpha=.7081$ であった。

情報収集意識・行動の因子分析結果では、第1因子は、「知りたい情報は積極的に集める」、「いろいろな情報を手に入れてから、必要なものを選ぶ」、「気がかりの内容によって情報源を使い分けている」、「親子での外出や活動を通して、役に立つ情報を得ている」の「情報積極収集」で、第2因子は、「人によって、情報の内容が違い困ることがある」、「情報量が増えれば、増えるほど混乱する」、「自分の子どもに必要な情報が入らないと不安になる」の「情報困難感」の2因子解で累積寄与率は35.6%、 $\alpha=.6833$ であった。

現在の母親達のしつけ・教育情報に関する意識・行動としては、情報量が増えれば増えるほど混乱する反面、知りたい情報を多く所有することには積極的である傾向が示された。その特徴としては、「専門性」志向で、テレビや書籍などの「マスコミ」や園の先生など「専門家」を重要視し、それと同時に身近な「親近性」が要になっていた。

また、現在、育児中である30代前半の母親達自身が、子ども時代にスイミングや音楽教室などの習い事や教室通いをした成育歴をもつ世代である。そのためか、親子で外出型の育児情報収集ネットワークづくりを行い、子どもを習い事や教室に通わせて、自然に抵抗感がなく専門家にしつけを委ねる「しつけエージェント」の外部化が本モデルにもあらわれていた。

それは、「準拠コミュニティ」として、“近所の友人”と学生時代や職場、子育てサークル、子どもの習い事などで知り合った“近所ではない友人”に加えて、“習い事や教室の先生”が含まれていたことにも表れており、現代の母親がしつけや教育情報源として準拠する集団の特徴を物語っていた。

図3に示した「育児情報積極収集モデル」の適合度GFIの値は0.92で、修正適合度AGFIの値は0.90と十分に高いことが検証された。

本モデルでは情報化時代に生きる母親の教育規範意識・行動と情報準拠集団である各種マスメディアや専門家、さらには子育てグループを含む友人などとの相互関係性を検証することを試みた。

ここで、特記すべきは、そのような積極的な母親であっても、同時に地域の身近な友人からの育児情報で不安感を抱えている事実であろう。

現在の育児支援政策は子育てネットワークや集会の場の提供など、地域集団での育児援助が主幹となっている。現在、少子化対策の一環として、保健センターや保育所が核となり地域での子育て支援や子育てネットワークへの行政からの援助が進められており、家庭教育や子育てサポーターの養成講座も盛んに行われている実情である。

しかしながら、それら準拠集団との母親の関わり、また、育児準拠枠としての活用情報源と育児情報行動との関係性の詳細についての研究はいまだ数少ない。

育児生活において母親が依存し同調する「準拠者」は、自分と類似しており、同じ信念・意見や態度をもつ準拠集団に属していることは前述したが、より身近に感じる内集団の内へと向かう凝集性(group cohesiveness)や内集団びいき(ingroup favoritism)が昂じて (Turner, J. C. 1982, Turner, J. C. & Tajfel, H. 1979, Tajfel, H. 1981)、そのことが内集団や集団間での問題を引き起こしている。

母親は準拠するいくつかの集団に対してそれぞれ異なった関わり方をしており、求めている育児情報支援によって準拠情報源を使い分けているが、それら内集団や集団間での人間関係の葛藤が深刻なことは過去の調査でも明らかな通りである (山岡 1991, 1996, 2000, 山岡ら 1998, 1999, 2001a)。Argyle, M., Henderson, M. & Furnham, A.(1985)は、友人、配偶者や家族・同居者、親子関係、職場の人間関係などでの対人関係を測る尺度から3つの満足次元因子、「I.物理的・助言的援助、II.社会的・情緒的支援、III.共通関心事」を抽出している。

それら3次元の組み合わせで高い数値を獲得しているのは、配偶者、親、同性の友人、兄弟姉妹などであった。また、彼らは友情が壊れるときの要素として「他の友人関係への嫉妬」や「秘密の漏洩」、「必要時の非援助」などを上位にあげており、準拠集団内での3人の女性(母親)同士の対人関係が内包する葛藤や危うさをも示唆している(Argyle, M. & Henderson, M. 1985, Argyle, M. 1967)。

そのような内集団において複雑な対人関係にある母親一人ひとりの個人特性にも焦点をあてて、地域コミュニティや子育てサークルによる不安感やストレス要因の詳細を考察し、多様化する育児情報ニーズに個別対応できる情報提供や支援のあり方を検討することの必要性を本モデルは示唆していた。また、相談機関やインターネットなど「個別アクセス」の活用度と育児不安要因項目との関連性を検討した結果では、個別アクセス高活用の母親は育児不安感が高いという実情であった。しかしながら、今後はインターネットやカウンセリングなどの相談機関の需要は急増しており、一般化されていくことが予測される。とくに、パソコンや携帯電話によるインターネットでの情報収集やコミュニティづくりが急速に伸びてきている傾向もあり、子育て時期の情報環境やネットワークの構造自体が変化している現状である。前述したように、育児情報源として母親達が「インターネット」を活用している割合は、この数年で急速に増加してきた。

それら育児情報の質の問題とともに、長時間、パソコンに向かうこともあり得るネットでのコミュニティづくりなど母親の情報収集行動が、子どもとの関わりへ投げかける影響も今後の検討課題になると思われる(山岡 2001b)。

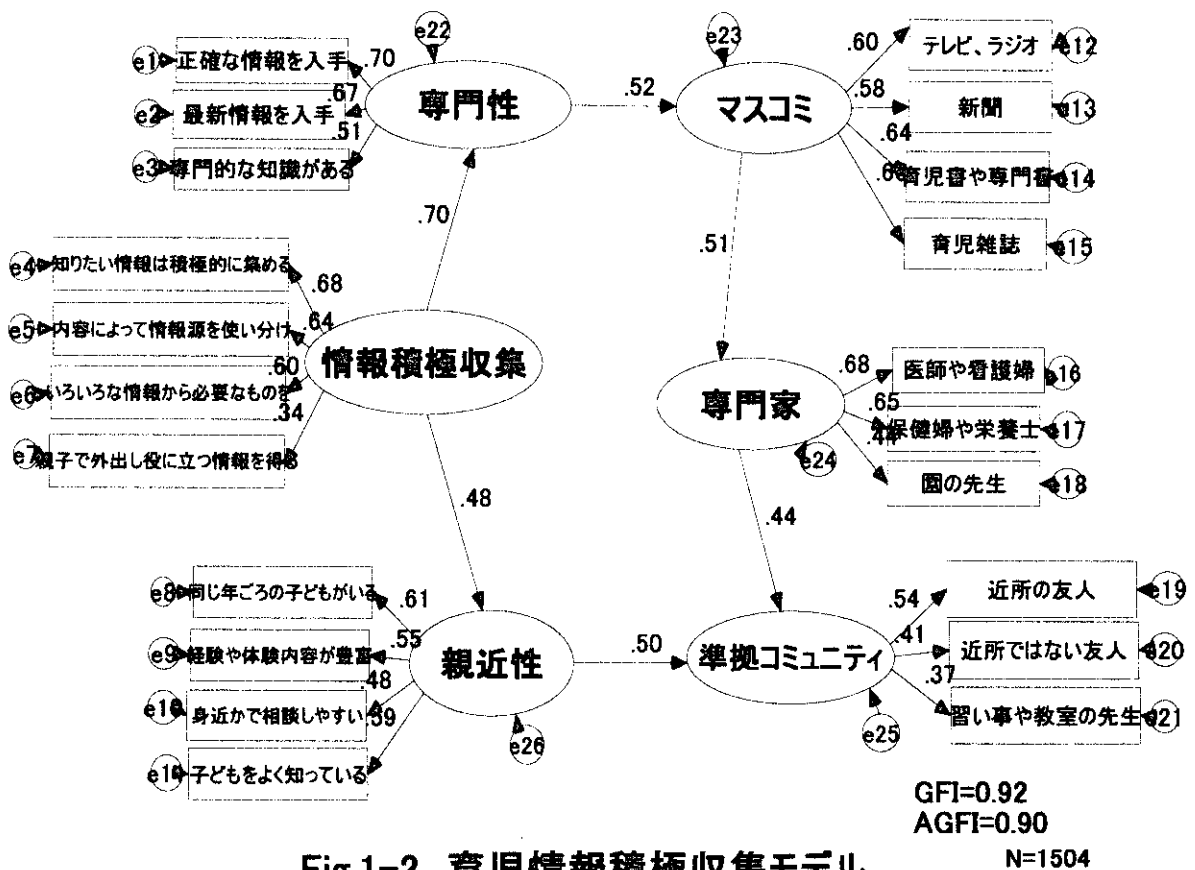
まとめ

1. 子育てグループへの参加意識は、「集団対人トラブル」、「親子活用意識」、「役立ち有効感」、「出会い親近感」、「社会性・安心感」の5因子解に分かれた。「いつも子どものことで相談する相手」として、「子育てサークル・グループ」を選んだ母親をこれら5因子と比較すると、第1因子以外は、すべて、極めて高い有意差があり、子育ての相談をグループ内のメンバーにしている母親は子育てグループ活動に積極的で肯定的意識をもって参加していることが明らかになった。これらの母親にとって「子育てグループ」は、彼女達の準拠情報源として確かな役割を果たして

いると思われる。

2. 日本人の母親および日本に住む 65 カ国籍の多文化な文化背景をもつ母親を対象にした 2 つの調査結果からは、民族や文化を超えて個人特性である『子育てつきあい積極的親和性傾向』が高い母親は育児不安が低いことが示された。また、就労状況別に日本人の母親の子育て支援環境を見ると、地域で過ごす時間が長い専業主婦は常勤者やパートタイマーに比べて「子育て仲間意識」が高く、夫からのサポートも高いと受けとめていた。然るに、パートタイムで働く母親は不安定な支援環境に置かれており、今後は、パートタイマーが多い多文化な母親も同様に、さらなる社会的援助や相互交流の機会が地域や職場で期待されている。

3. 母親達を取り囲む育児情報環境は近年大きく変化した。それは、外出育児用品の普及による外出型育児やインターネットによる育児情報ネットワークの構築、さらに、公的・私的子育て



ループの拡充が拍車をかけた。母親達は、積極的に準拠したい「子育てグループ」などコミュニティに参加しているが、母親にとって子育てグループは、子育ての悩みを共感できる友人との出会いの場になると同時に、対人関係の悩みが増えていき、不安が増幅するという諸刃の刃のような存在になる側面もあることをいずれの調査結果も示していた。

4. 母親は準拠するいくつかの集団に対してそれぞれ異なった関わり方をしており、求めている育児情報支援によって準拠情報源を使い分けているが、それら集団間や内集団での人間関係の葛

藤が深刻なことは過去の調査でも明らかになっている。それら集団において複雑な対人関係にある母親一人ひとりの個人特性にも焦点をあてて、地域コミュニティや子育てグループによる不安感やストレス要因の詳細を考察し、多様化する育児情報ニーズに個別対応できる情報提供や支援のあり方を検討することの必要性を調査結果は示唆していた。

引用文献

- 青木まり・松井豊・岩男寿美子 1986 母親の意識から見た母親の特徴——ライフ・ステージ、自己評価、充実感との関係から—— 心理学研究, 57, 207-213
- Ajzen, I., & Fishbein M., 1980 *Understanding attitudes and predicting social behavior*. Prentice Hall
- Argyle, M. 1967 *The psychology of interpersonal behaviour* (5th ed., 1994) Penguin Pp.130 - 198
- Argyle, M. & Henderson, M., 1985 *The Anatomy of Relationship*, Penguin
- Argyle, M., Henderson, M., & Furnham, A., 1985 'The role of social relationships', *British Journal of Social Psychology*, vol. 21, 287-315
- Bentler, P. M., & Speckart, G., 1979 Models of attitude-behavior relations. *Psychological Review*, 86, 452 - 464
- Foa, U. G. 1971 Interpersonal and economic resources. *Science*, 171, 345 - 351
- Gouldner, A. W. 1960 The norm of reciprocity : A preliminary statement. *American Sociological Review*, 25, 161 - 179
- 池田謙一 1996 ソーシャル・ネットワークと情報機器使用 情報化社会と青少年 第3回情報化社会と青少年に関する調査報告書 青少年対策本部, 223-243
- 川井尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中野恵美子・恒次欽也 1994 育児不安に関する臨床的研究——幼児の母親を対象にして—— 日本総合愛育研究所紀要, 31, 27 - 42
- Kiesler, C.A., & Kiesler, S. B., 1969 Conformity. Addison-Wesley 早川昌範訳 1978 同調行動の心理学 誠信書房 Pp.54-55
- 牧野カツコ 1982 乳幼児をもつ母親の生活と育児不安 家庭教育研究所紀要, 3, 34-56
- 中村敬・小山修・原田正文・松田博雄・山岡テイ・斎藤進・長坂典子・西郷康之・吉田真理・井深英治 2002 子育てグループ（サークル）活動参加に関する全国実態調査結果 「地域における子育て支援ネットワークの構築に関する研究」 子ども家庭総合研究事業報告書 376-389
- 大日向雅美 1988 母性の研究 川島書店
- 坂本純子・雲雀信子・森田圭子・加藤恒・山岡テイ 2001 i モード世代の母親たちの仲間づくり 今どきフォーラム SAITAMA
- 佐藤達哉・菅原ますみ・戸田まり・島悟・北村俊則 1994 育児に関連するストレスと抑うつ重症度との関連 心理学研究 64, 409-416
- Sherif, M. & Sherif, C. W., 1964 *Reference Groups: Exploration into Conformity and Deviation of Adolescents*, Harper & Row, 重松俊明監訳 1968 規範集団 —青少年の同調と逸脱— 黎明書房 Pp.208
- Tajfel, H., 1981 *Human groups and social categories* Cambridge University Press
- Turner, J. C., 1982 Towards a cognitive redefinition of the social group. In Tajifel, H. (Eds.) *Social identity and intergroup relations* Cambridge University Press
- Turner, J. C., & Tajifel, H., 1979 An integrative theory of intergroup conflict. In W. G. Austin & S. Worchel (Eds.), *The social psychology of intergroup relations*. Brooks-Cole

- 山岡テイ 1995 母親達の育児情報の受けとめ方に関する考察 母子保健における情報の整理と育児への応用に関する研究 厚生省心身障害研究 少子化時代に対応した母子事業に関する研究 平成6年度研究報告書 308-320
- 山岡テイ 1996 幼児の子育て・教育観 ベネッセ子育て研究所
- 山岡テイ・後藤憲子・川上道子・間瀬尚美・沓澤糸 1998 子育て生活基本調査報告書 研究所報 14, ベネッセ教育研究所
- 山岡テイ・樋田大二郎・木村敬子・渡邊秀樹・後藤憲子・川上道子・間瀬尚美・田村徳子 1999 子育て生活基本調査報告書Ⅱ 研究所報 16, ベネッセ教育研究所
- 山岡テイ 2000 育児不安と育児情報に関する子育て調査 情報教育研究所
- 山岡テイ・谷口正子・森本恵美子・朴淳香 2001a 多文化子育て調査報告書 多文化子育てネットワーク
- 山岡テイ 2001b 育児情報の活用意識・行動と育児不安の関連性 チャイルドヘルス 第4巻 第12号 診断と治療社 56-59
- 山岡テイ 2002a 働く母親の育児不安——就労状況、活動状況や支援環境を中心にして 産業カウンセリング研究, 5, 1-9
- 山岡テイ 2002b 育児規範と準拠情報源の研究 平成14年度課程博士学位請求論文 立正大学文学部大学院
- 吉田弘道・山中龍宏・巷野悟郎・太田百合子・中村孝・山口規容子・牛島廣治 1999 育児不安スクリーニング尺度の作成に関する研究——1・2ヵ月児の母親用試作モデルの検討—— 小児保健研究, 6, 697-704

「地域における子育て支援ネットワーク構築に関する研究」

研究協力者報告書

インターネットを利用した子育て支援ネットワークの構築と実証
—三鷹市の取り組み—

研究協力者 松田博雄 杏林大学小児科

研究要旨

三鷹市では平成 13 年度からインターネットを利用した子育て支援ネットワークを構築し実施している。通商産業省の「介護・子育て分野における革新的なサービス提供に資する IT 活用事業」を三鷹市が中心市街地活性化法に基づき「特定会社」として設立したまちづくり三鷹が「地域全体による育児支援ネットワークの構築及び実証・評価実験」プロジェクトを応募し、平成 12 年に採択されたことが契機となった。

インターネット上に「みたか子育てねっと」を立ち上げ、子育て機能を持つ子ども家庭支援センター、総合保健センターなどの三鷹市の様々な機関および民間の幼稚園や保育所、民間ボランティア、NPO 団体などを集結させた。三鷹市の情報と募集したボランティアによる民間の地域の情報を子育て施策、子育てナビ、保育園・幼稚園、相談、ファミリーサポート、子育てひろば、子育てコンビニなどとして発信した。

ホームページには月平均 3000 件のアクセスがあった。インターネットは地理的、時間的、年齢格差を越えたコミュニケーションを、正確に迅速に伝えることできた。しかしファミリーサポートなどではコーディネーターを配置し、対面に対応するなどの人と人との心の通った対応もおこなった。また、この事業を展開する過程で、三鷹市の中での各部署の連携、保育園のホームページ作りの過程での意識の向上、民間ボランティアの活動を通して市と民間との意思の疎通がはかられ、さらに、民間の中で積極的に仲間作りがはかられるようになった。

見出語 インターネット みたか子育てネット ファミリーサポート 子育てひろば

A. 研究目的

I. 背景

子どもを取り巻く環境は出生率の低下、年少人口の減少、核家族化の進行など大きく変化し、地域全体での子育て力が低下してきており、とくに地域コミュニティによる「地域の人々の目の届く」子育て環境から「家庭もしくは施設」による密室の孤独な育児環境になってきている。

三鷹市では平成 7 年に子育て支援に関するアンケート調査（注 1）を行い、子育てが当たり前の時代ではなくなり、家庭という密室の中で育児が行われるようになってきていることが明らかにされた。子育て支援は、問題のある子どもと家庭を対象とするのではなく、全ての家庭を対象に行われるべきであることが提起された。

三鷹市は平成 9 年 3 月に「三鷹市児童青少年総合施策—子育てにやさしいまち・三鷹を目指し

て（エンゼルプラン）」を策定し、同年に最初の子ども家庭支援センター（注2）、すくすくひろばを立ち上げ、子どもと家庭にとって一番身近な社会の中で、子育て環境を整備し、様々な子育て支援施策をたて実施してきた。また「子どもの相談連絡会」（注3）を拡充し、子ども家庭支援センターが中心となり運用することを市の条例で規定し、子どもと家庭を中心にして、子どもの関わる諸機関と人とのネットワーク構築している。

そのような過程の中で、通商産業省の「介護・子育て分野における革新的なサービス提供に資するIT活用事業」（注4）を三鷹市が中心市街地活性化法（注5）に基づき「特定会社」として設立したまちづくり三鷹（注6）が「地域全体による育児支援ネットワークの構築及び実証・評価実験」プロジェクトを応募し、平成12年に採択された。

このプロジェクトの目的の骨子は

①子育てについて市民相互の理解を深め、交流の輪を広げる。

インターネット上で、全ての家庭を対象に子育てに関する情報を共有化できる環境を整備する。子育てをする仲間の交流の場、子育てボランティアなどの活動を促進、支援する。また保育状況を公開する。

②子どもをすこやかに育む、地域で支えあう。

子育て中の保護者が抱える子育ての不安や悩みを解消し、親が安心して子育てができるように、メール相談をおこなう。

③子育て環境をつくる

核家族化や共働き家庭の増加により、ちょっとした用事や兄弟の行事に参加する際、子どもを預けることが困難になってきている。短時間子どもをみてもらうために、三鷹市では平成13年度からファミリーサポート事業を開始した。保育ボランティア（提供会員）とサービスを受ける会員（利用会員）の利便性を向上させ、援助者の人材の確保と養成に努め、利用者の要望に答えることのできる正確な、迅速な効率的なシステムを構築する。

II. プロジェクトの全体概要

インターネット上に子育てに関する総合的な窓口、子育てポータルサイト「みたか子育てねっと」を構築する。サイトに子育て機能に関係する三鷹市の子ども家庭支援センター、三鷹市北野ハピネスセンター、総合保健センター、ファミリーサポートセンター、児童館や市および民間の保育園、保育室、民間のボランティア、NPOなどを集結させる。

利用者は自宅のパソコンや携帯電話などでインターネットでアクセスする。

情報提供システムは大きくITコミュニケーション、ネット相談システムとその他のコンテンツに分かれ、三鷹市側の官側サイト（お知らせ、子育て施策、子育てナビ、保育園・幼稚園およびネット相談）と民間サイト（子育てコンビニ）が運用する。

III. サイトの内容

1 お知らせ

お知らせ情報一覧

2 子育て施策

児童福祉に関連する事業・制度を紹介するサイトである。諸手当・医療健康一覧・詳細と申

請書をダウンロードすることができる。各種健康相談とその概要、保育関連施設や設備など一覧がある。その他一覧には母子福祉基金、ひとり親家庭リクリエーションと子どもショートステイ、緊急一時保育などの情報が得られる。

3 子育てナビ

利用者がプロフィールを入力することによって、受給できる子育てサービスを絞り込む形で検索ができる。また必要な書類をダウンロードできる。

4 保育園・幼稚園

三鷹市における、市立および民間の保育施設、幼稚園の情報（住所、定員、行事予定、運営方針など）が入手できる。またそれぞれのホームページにアクセスできる。必要な書類をダウンロードできる。欠員情報、待機待ちの情報が得られる。

5 子育てコンビニ

協力してくれる市民を公募し、身近な新しい情報を提供する。内容として、すくすくひろばの子育てワンポイント（当初）、親業ってご存知ですか（当初）、ジブリ美術館（当初）、子育てコンビニとはほか以下の項目がある。

おでかけ：公園、ショッピング、おけいこ、レストラン、らくちんトイレ、おでかけレポート、児童館などの情報がある。

あそび・てづくり：手作りおもちゃ・工作、体操、絵本の読み聞かせ、新刊本・おすすめ絵本などがある。児童館での自主的な催し案内なども掲載されている。

クッキング：離乳食、簡単クッキング、お菓子などがある。

けんこう：休日診療所・歯科応急診療所、病気の基礎知識、歯の健康や民間療法の案内などがある。

Cast：ボランティアで参加してくれた人のメッセージ、ワークショップ風景など

あずける：保育園や認証保育所、病児保育などの案内が掲載されている。

What's New（じょうほう）・あずける

カレンダー（さまざまな行事の予定表）、自主グループ紹介などがある。保育園などの情報なども逐次掲載されている。

6 子育てひろば

利用者がインターネット上から自由に書き込むことのできる、子育てに関する掲示板である。子育てコンビニから入ることもできる。

7 相談（子育て相談と子ども相談）

ここではインターネットによる相談（メール相談）を受け付けてる。パソコンや携帯電話から相談することができる。

8 ファミリーサポート

三鷹市子育て支援室、ファミリーサポートセンターとその会員（利用会員、援助会員）を結び、まちづくり三鷹にサーバーを設置し、ファミリーサポートセンターにコーディネート用パソコンを設置し移動性、随時性に優れた携帯端末を利用する。電話による支援ニーズ把握と提供の状況を把握する。ファミリーサポートで行う援助の内容、利用会員になるには、援助会員になるには、利用申し込みができる書式をダウンロードできる。

9 IT コミュニケーション

「みたか子育てねっと」には掲載されていないが、保育状況のビデオ映像をインターネットを

通して配信する。特に病後児の子どもの様子などを映像で見ることができる。携帯電話も利用する。市内の特定の保育園などをモデルとしてパソコンや携帯電話などを用いて実施する。

B. 研究方法

このプロジェクトは平成13年4月から順次運用を始めた。平成13年10月から1月に、コンピュータのログ解析、みたか子育てネットを通してのオンラインアンケート、保育園、幼稚園、児童館、ひろばなどでのオフラインアンケート結果が平成14年2月にまとめられた。調査結果とまちづくり三鷹での聞き取り調査をもとに検討した。

C. 結果

1. 利用に関すること

- ・「子育てコンビニ」と「保育園・幼稚園」の利用が多かった。
- ・夜9時以降の利用が多かった。市役所閉庁後の午後6時から深夜にかけての利用が多かった。
- ・平日利用が多く、週末、休日の利用は極めて少なかった。
- ・1回だけの利用が57%、複数回の利用が43%であった。
- ・1回の利用時間は5分以内が43%であった。
- ・仕事をしている主婦や仕事や就労に関心の高い層の利用が高かった。

2. 子育て施策・子育てナビ

- ・子育て施策14%、子育てナビ3%の利用であった。
- ・市内の自主サークルなどからのリンクの依頼が6件あった。
- ・ナビゲーションシステムは支持する意見が多かったが、現状では必要とするサービスがないという理由で、利用は少なかった。
- ・申請書を開いたりダウンロードすることはみられるものの、実際に市の窓口へ提出したのはわずか0.8%であった。

3. 保育園・幼稚園

- ・最も閲覧時間が多かったのは23:00～00:00時であり、子育て真っ最中の親は、深夜にならないと見る余裕がないことが伺われた。
- ・参考になったとの意見が多かった。
- ・このホームページを見ることにより、市窓口での相談時間の短縮が実現できた。
- ・転入予定者の問い合わせに、当ホームページは有効であった。
- ・欠員情報は需要が高い。
- ・しかし現実には欠員はほとんどなく、待機者数の情報を掲載し有用であった。

4. 子育てコンビニ

- ・最も閲覧率が高く21%であった。
- ・最も多い閲覧時間は22:00～23:00であった。
- ・参考になった、有効であった(57.3%)、もう少し幅広い情報が欲しい(49.9%)だった。
- ・このサイトは民間の広報やパンフレットで公募し、ワークショップを構成したボランティア